様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月 11 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：平成 19 年度～平成 21 年度
課題番号：19720099
研究課題名（和文）　上ソルブ語の文法が受けるドイツ語の影響についての基礎的研究と資料アーカイブ設計
研究課題名（英文）　Basic research on the influence of German in Upper Sorbian grammar and design of digital archiving of materials

研究代表者
笹原　健（SASAHARA KEN）
麗澤大学・外国語学部・非常勤講師
研究者番号：10438921

研究成果の概要（和文）：
ドイツ語と絶えず接触している状況にある上ソルブ語では，さまざまな面でドイツ語の影響と思われる現象がみられる。たとえば，上ソルブ語の発話中にドイツ語語彙が現れることは少なくない。しかし，それらを詳細に観察すると，名詞のみならず，間投詞，副詞もドイツ語語彙が多用されていることがわかった。また，動詞接頭辞にも，いくつかのドイツ語分離動詞前綴り（*hin-*，*los-*など）が上ソルブ語の動詞接頭辞として使用されていることがわかった（*hinpadnyć* (*hin-*落ちる)「下に落ちる」，*losjěć* (*los-*行く)「出発する」)。さらに，上ソルブ語は冠詞を持たない言語であるが，話し言葉においては，指示詞 *tón*「この」，数詞 *jedyn*「1」がそれぞれドイツ語の定冠詞 der/das/die，不定冠詞 ein/eine のごとく冠詞的に用いられやすいことをつきとめた。
これらの言語事実は，今後の研究の道筋を立てるのに十分な成果だと言える。
文法記述と平行しておこなった資料アーカイブについては，SIL が配布しているフリーソフトウェア Field Linguist's Toolbox によるテキスト資料電子化に取り組んだ。その結果，比較的まとまった量の電子テキスト集が整い，さまざまな文法事項についての考察を行うための基盤ができたと考える。

研究成果の概要（英文）：
Upper Sorbian, which is always under the contact situation with German, has many characteristics which is thought to be a result of influence from German. For example, lexical words of German often come to Upper Sorbian conversation. The fact that not only German nouns but also interjections and adverbs may appear is a striking finding. Such German elements are also found in the area of morphology. Upper Sorbian has prefix on verb as in many other Slavonic languages. The peculiar in Upper Sorbian is the fact that German verb prefixes hin- “to”, los- “off (to)” and so on are also used: *hinpadnyć* (*hin-* + fall) “to fall down”, *losjěć* (*los-* + go) “to set off”. Further, in colloquial Upper Sorbian, demonstrative *tón* “this” and numeral *jedyn* “one” are used respectively as definite and indefinite articles very often, although the language lacks both articles.
The data collected through the field work are electronically stored in the *Field Linguist's Toolbox*, which is distributed by SIL. The archiving work makes the basis for future research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	0	900,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	360,000	2,460,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：上ソルブ語，文法，言語接触，資料アーカイビング

１．研究開始当初の背景

これまで研究代表者は，ドイツで話されている上ソルブ語の文法の全体像を記述すべく，個別文法現象の記述に取り組んできた。しかし，より高次の記述を成し遂げるためには，以下の２つの課題に取り組むことが必要であると判断した。

１）この言語の自然発話を観察すると，ドイツ語の語彙的要素や文法的要素が現れることがよくみられる。現代上ソルブ語文法の全体像をとらえるためには，この言語の文法体系がドイツ語からどのような影響を受けているかを考えることが不可欠である。また，このテーマは，上ソルブ語の話者は自民族の国家を持たない少数民族であり，ドイツ語との日常的二言語使用者である。また，言語自体も国家言語であるドイツ語とつねに接触している点，話者の数が徐々に減少している点で，単なる言語事象の記述にとどまらない。すなわち，この問題を明らかにすることは，上ソルブ語研究のみならず，言語接触，言語の（再）活性化など他分野に対してもケーススタディを提供することができる。しかし，この問題は非常に大きなテーマであるため，本研究期間ではその基礎的研究にしぼり，今後の研究の基盤を作る必要があった。

２）これまで研究代表者が現地調査において収集した音声資料は，必ずしも最適な形で整理されていなかった。したがって，音声資料アーカイビングの方法論を設計・確立する必要性があった。それまでも SIL で配布されているフリーソフトウェア Field linguist's Toolbox で必要最低限のデータ格納は行っていたが，汎用的なアーカイビングに資するためには再設計をして運用することが重要である。そして，他の研究者と知識を共有することは，きわめて有用なことである。

２．研究の目的

上ソルブ語の言語接触に関する研究は広くなされているが，一般言語学の枠組みにもとづいてドイツ語の影響を主題として扱った上ソルブ語の文法記述はごく限られている。

研究代表者の研究期間開始前からの観察によれば，母語話者の話すソルブ語には，比較的頻繁にドイツ語語彙が現れる．このドイツ語語彙は大きく分けて 2 つに分けられる：(1)ソルブ語の形態音韻的プロセスを経たもの（*apholować* <独 abholen「取ってくる」，*kopěrować* < 独 kopieren「コピーする」など），(2)ソルブ語の文法プロセスを受けていないもの（*dink* < 独 Ding「もの」）．

直感的に考えられるその出現の背景としては，(1)問題の語彙がソルブ語の語彙体系中で借用語として定着している場合と(2)その話者が当該のソルブ語語彙を知らない（あるいは）思い出せない場合，が考えられる．(1)はレキシコンそのものによる要因，(2)は話者の言語運用能力に起因する要因であると捉えられる．しかし実際の発話では，*alzo*< 独 also「ええと」といった間投詞や *fünfuntcvancich* < 独 fünfundzwanzig「25」といった数詞までもが現れることもあるため，上記 2 つの要因だけでは説明がつかない．

また，統語の面においてもドイツ語の影響が見られる．ソルブ語の語順は，好まれるものがあるものの，原則として自由である．動詞部が定形動詞のみによって表される単純な単文では，独立した主語が現れていない場合は動詞が文末に現れ，独立した主語が現れている場合は動詞が第二位に現れることが多い．しかしながら，助動詞（定形部）＋不定詞／分詞（非定形部）からなる分析的な動詞表現は：

要素 1 ―［動詞定形部 ― (要素 2 ―) (要素 3 ―) (… ―) 動詞非定形部］(( )内は随意的要素)

のように，定形部は第二位に，非定形部は節末に置かれることが多く，ドイツ語の枠構造を想起させる．

現代の上ソルブ語の文法を包括的に記述するためには，上記のようなドイツ語の影響と思われる要素を看過することができない。そのためには，上ソルブ語におけるドイツ語の影響の詳細を明らかにする必要がある。この問題を解明するための基礎的研究をおこない，全体像を記述するための土台作りをおこなうのが，本研究課題の主目的である。そのためには，既存の資料を含め，効率的に分析を行えるような資料体を構築することが必要となる。したがって，体系的な資料アーカイビング方法の確立を行うことが，第２の目的である。

３．研究の方法

これまでに収集した既存音声資料の分析を進めるともに，現地調査を実施して新たな資料ならびに分析の過程で生じた問題点を明らかにするための資料を収集した。調査地は

ドイツ・ザクセン州バウツェン郡クロストヴィッツ村とレッケルヴィッツ村で行った。

自然発話資料の収集には，上ソルブ語話者に短編映画 *Pear film* を提示して，その内容を語ってもらう形式で行った。音声データは WAV 形式で録音し，コンピュータ上の HDD ならびに CR-ROM に記録・保管している。またその複製を音楽 CD としても保存している。その後，音声資料の文字化を行い，形態素分析ならびに日本語訳とドイツ語訳を付した形で整備した。これらの資料は，文字化ならびに参照用のインデックスを付加した形とし，コンピュータで扱うことのできる汎用的な機械可読データとして，最終的には将来のソルブ語文法研究にも堪えうるような資料体にすることを目標に整備を行った。

収集・整備した資料を，音韻，形態，統語，レキシコンのさまざまな面から分析し，現代上ソルブ語の文法体系がドイツ語からどのような影響を受けているか，そのメカニズムを包括的かつ記述的に考察し，その基礎的問題を解明することにつとめた。

４．研究成果

（１）上ソルブ語の再帰代名詞対格には長形 *sebje* と短形 *so* が存在する。その用法はドイツ語の再帰代名詞 *sich* とおおむね近いが，長形と短形の使い分けが明確ではなかった。既存資料の再分析の結果，以下の諸点が明らかになった。

I. 長形 *sebje* が用いられない場合には，以下の統語的傾向がある：

- 前置詞の目的語である場合，
- 再帰代名詞が必須である，いわゆる「再帰動詞」で現れる場合。

これらの場合は，短形 *so* が選択される（ただし，前置詞 *na* と za では長形も現れうる）。

II. 長形 *sebje* が直接目的語として用いられる場合は，動詞によって表される，事態の特性が関与している：

- その動作が自分に対してなされることが容易に考えられるか。

以上をまとめると，長形 *sebje* と短形 *so* の選択には統語的要因と意味的要因が関与していると考えられる。

長形 *sebje* の出現頻度は短形 *so* に比して低い。しかも，再帰代名詞が動詞の目的語として現れる場合，*sebje* が単独で現れるほか，代名詞 *sam-*「自分」の支えを借りて再帰性を表現することが少なからずある（*sebje* ***sam-oho***/ ***sam-eje***/ ***sam-ych*** (REFL.LONG.ACC 自分 -MNSG.ACC/ FSG.ACC/PL.ACC)）。このことから，長形 *sebje* の担っている意味的再帰性は，失われつつあると考えられる。したがって，単なる *sebje – so* という対立から，*sebje sam- – so* という対立へとシフトする途上にあると見ることができる。

（２）2007 年 8 月におこなった現地調査で収集した音声資料をもとに，自然発話テキスト内の結束度という観点から文頭要素，主語，受動態の関係を考察した。その結果，以下の (a)-(c)が指摘できる。

(a)文頭要素，主語，受動態には，主語の指示対象が既知であるか，未知であるかが関与しており，既知のものは（多く指示詞 *tón*「この」を伴い）文の前方に現れやすく，未知のものは（多く数詞 *jedyn*「１」を伴い）文の後方に現れやすいことがわかった。

(b)主語の指示対象が直前の主語のそれと同一であるか（SS），異なっているか（DS）が明示的主語の出現／非出現にかかわっていることも相関している。SS かつ前後の事態が継起的あるいはひとまとまりだと話者が想定している場合には主語が明示されず，SS であっても前後の事態が別のものであると話し手が考えている場合は主語が明示されやすい。これにより，主語の明示は，DS であることを積極的に表す手段であることが示唆される。

(c)述べられている場面もひとつの要因になりうる。描写している場面が転換している場合は，SS の場合であれ，DS の場合であれ，明示的主語が出現しやすい。場面の転換が生じない場合には，直前に別エピソードの挿入があっても，その復帰時に明示的主語が現れにくくなる。

（３）上ソルブ語話しことばテキストにおいては，さまざまな一連の特徴がある。そしてこれらの特徴は，ある程度の規則性が認められる。

1) 数詞*jedyn*「1」> *jen*，動詞*padnyć*「落ちる」> *panyć*など，特定の環境における，ほぼ規則的な音の脱落，
2) 数詞*jedyn*「1」，指示詞*tón*「これ，この」の不定冠詞，定冠詞としてのほぼ規則的な使用，
3) 間投詞，副詞におけるドイツ語語彙の多用，
4) いくつかのドイツ語分離動詞前綴り（*hin-*，*los-*など）を上ソルブ語の動詞接頭辞としての使用（*hinpadnyć* (*hin-*落ちる)「下に落ちる」，*losjěć* (*los-*行く)「出発する」）。

（４）冠詞を持たない上ソルブ語において，冠詞的に用いられている指示詞 *tón*「この」，数詞 *jedyn*「1」の現れ方について，ドイツ語の冠詞との類似点，相違点を把握するための資料を収集した。上ソルブ語における情報構造を明らかにする必要を認識するに至り，本

研究課題をさらに発展させる道筋を立てることができた。

（５）資料のアーカイビングについては，(a) アナログ音源の電子化，(b) SIL が配布しているフリーソフトウェア Field Linguist's Toolbox によるテキスト資料電子化に取り組んだ。その結果，大部分の資料について，上ソルブ語テキストに日本語注釈と英語注釈を施した電子テキストコーパスを作成することができた。比較的まとまった量の電子テキスト集が整ったことにより，さまざまな文法事項についての考察を行うための基盤ができたと考える。このテキストコーパスをさらに拡充するために，そしてドイツ語との影響関係についての分析を円滑に進めるために，ドイツ語注釈を付す作業がさらに必要となるが，この点は今後の課題としたい。

以上のことがらにより，本研究課題における所期の目標はおおむね達せられたと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1. SASAHARA, Ken “Upper Sorbian Pear Stories by young speakers with grammatical analysis and comments”. 稗田乃，峰岸真琴，川口裕司編『コーパスに基づく言語学教育研究報告 2：言語記述から言語分析の応用へ』. 府中：東京外国語大学大学院地域文化研究科グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」. pp. 117-141. 2009 年 3 月.
2. SASAHARA, Ken „Němske wliwy na hornjoserbšćinu pola młodźiny w rěčnym teksće “［若者テキストにおける上ソルブ語へのドイツ語の影響］. *Pro Lusatia* 7. pp. 91 - 97. 2009 年.
3. KIMURA, Goro Christoph, SASAHARA, Ken „Zajim za Serbow a sorabistika w Japanskej“［日本におけるソルブ人・ソルブ学への関心］. *Pro Lusatia Opolskie Studia Łużycoznawcze* 2009, tom 8. pp. 6-18. 2010 年 2 月.
4. 笹原健，木村護郎クリストフ「日本におけるソルブ研究の歴史と動向」.『西スラヴ学論集』14. pp. 6-30. 2010 年 3 月.

〔学会発表〕（計６件）

1. 笹原健「上ソルブ語の再帰代名詞対格長形 *sebje*」. 日本言語学会第 134 回大会. 2007 年 6 月 16 日（於麗澤大学）.
2. 笹原健「上ソルブ語における文頭要素と主語 － 受動文の代替手段－」. 世界の諸言語における態（voice）の類型論的研究 2007 年度研究会. 2008 年 2 月 9 日（於国立民族学博物館）.
3. KIMURA, Goro Christoph, SASAHARA, Ken „Sorabistika w Japanskej - stawizny a prospekty“［日本におけるソルブ学：回顧と展望］. X Dni Łużyckie（於オポレ大学(ポーランド)）. 2008 年 12 月 1 日.
4. SASAHARA, Ken „Němske elementy w hornjoserbskej rěče pola dźensnišeje młodźiny“［こんにちの若者の上ソルブ語におけるドイツ語的要素］. X Dni Łużyckie（於オポレ大学(ポーランド)）. 2008 年 12 月 2 日.
5. SASAHARA, Ken “German 'Borrowings' in the Colloquial Upper Sorbian Language in the Context of Language Contact”. First East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies 2009（於 北海道大学）. 2009 年 2 月 5 日.
6. SASAHARA, Ken “Publishing the text collection: from data processing to the product as a flow“ (Colloquium: Language Documentation Research in Japan: Up until now and the future). The 1st International Conference on Language Documentation and Conservation (ICLDC). （於 the Hawaii Imin International Conference Center, the University of Hawai‘i）. 2009 年 3 月 13 日.

〔図書〕（計１件）

1. 『事典世界のことば 141』（梶茂樹・中島由美・林徹編）.「ソルブ語」担当（pp. 432-435）. 東京：大修館書店. 2009 年 4 月.

６．研究組織
(1)研究代表者

笹原健（SASAHARA KEN）
麗澤大学・外国語学部・非常勤講師
研究者番号：10438921

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし